

新・下野市風土記

地震の話



下野市教育委員会 文化財課

先日、栃木県で最も古い、文化財に関する公式報告書『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯』(大正15年発刊)に、気になる記述を見つけました。

「下野国分寺・尼寺は、鎌倉時代の文治2(1186)年5月29日の地震の被害で倒壊したと東鑑(吾妻鏡)に記されている」と書かれていたのです。

どうして下野国分寺と尼寺が、文治地震が原因で倒壊したということになったのでしょうか? 尼寺跡がどこにあるかもわかっていない時代なのに、倒壊の原因が書かれているのは、いったい何故?

こうなってくると、文治地震について調べないわけにはいきません。

文治地震とは

文治地震は、元暦2年7月9日午刻(先発グレゴリオ暦1185年8月13日の正午頃)に発生した地震ですが、翌月の8月14日に文治に改元されたことから※、文治地震と呼ばれます。

律令体制が崩壊して以後は、地方に関する記録が少なくなることから、この地震がどこで起きたのか、震源地・震央はどこなのかを文献や史料から読み取ることは難しいです。一方、当時、都があった地域については、次のように多くの被害が克明に記録されています。

- ・東寺(京都)の鐘楼の倒壊
- ・法勝寺(京都)の金堂・鐘楼の倒壊、阿弥陀堂の九重塔の損壊
- ・宇治橋(京都)の落下
- ・比叡山延暦寺(滋賀県)の諸建物の損壊
- ・三井寺(滋賀県)の金堂回廊の損壊
- ・唐招提寺(奈良)千手観音の転倒

これらの被害が京都や近江に集中していることから、琵琶湖西岸断層帯(いわゆる堅田断層)の活動が文治地震の原因とする説があります。発掘調査により、滋賀県内や琵琶湖周辺で地割れや噴砂も確認されています。

これに対し、文治地震を南海トラフ巨大地震

による被害とする説があります。古代末から中世にかけて南海トラフ巨大地震と推定される地震の記録は、永長地震(1096年)、康和地震(1099年)、正平地震(1361年)などがあり、静岡市、和歌山県、大阪府堺市などでは、これらの地震によると推定される液状化現象、地割れ、砂礫層が確認されています。しかし、先にも述べたとおり、中世の記録は京都と鎌倉周辺のものが中心で、地方のものは残されていないため、文治地震が広域に被害をもたらす巨大地震だったのかどうか、はっきりとしたことはわかりません。ただ、『平家物語』に、一連の京都や近江付近の寺院損壊に関する記事と共に、「遠国近国もかくのごとし」と記されています。正否の程はわかりませんが、文治地震が、列島各地で同様の被害を引き起こすような巨大地震だったのかもしれないと思わせる記述です。

※改元に諸説あり

この改元には、地震原因説と源平の合戦(壇ノ浦合戦)などの戦乱説があります。さらに『平家物語』では、地震を起こしたのは平氏の怨霊だと記されています。

文治地震と下野国分寺・尼寺のつながりは?

文治地震の原因が琵琶湖西岸断層帯であれ、南海トラフ巨大地震であれ、下野国分寺・尼寺の倒壊とは、なかなかつながりません。

中世の地震で、下野国分寺・尼寺を倒壊させるような可能性の想定される地震は、文治地震ではなく、正応6年4月12日(ユリウス暦1293年5月19日)に関東地方南部で発生し、建長寺などの寺院を損壊させたマグニチュード8級の鎌倉地震か、それよりも前、正嘉元年8月23日

(1257年10月2日)に発生した正嘉鎌倉地震などの相模トラフ地震と考えられます。

また、神奈川県海老名市の相模国分寺は、元慶2(878)年の相模・武蔵地震で本尊などの仏像が破損し、その直後の火災で焼失したという記録が残されています。

報告書は、この相模国分寺と下野国分寺を混同したのかもしれませんがね。

下野国分寺跡七重塔

